
歪んだ日常

妄想Kei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歪んだ日常

【Nコード】

N3459Y

【作者名】

妄想Kei

【あらすじ】

日常にはいつもどこか違和感がある。
幻想的な、空想的な。
でもそれらはけして掴めるものじゃなかった。
日常は酷く歪んでいる。

歪んだ日

目が覚める。

俺は寝ていたのだろうか？それすらわからない。しかし目が覚めた、と自覚しているからには、俺は眠っていたに違いない。そうだ。きつとそうだ。

とりあえずテレビをつけようと、俺はリモコンを手に取り電源ボタンを押す。

テレビに映ったものは砂嵐。ザーザーと耳障りな音だけが部屋に響いていく。

俺はそんな「無」を流し続けるテレビの画面をじっと見つめていた。

しばらくすると、ニュースらしき番組が映し出された。右上に時間が表示されている。

「26:68」

これは果たして時間なのだろうか。時間にすれば昨日から見た明日の3時8分。最近のテレビはまともに時間さえも教えてくれないのか。

くだらない。全てくだらない。顔でも洗いに行こう。

洗面所に行くと俺よりも大きな、巨大な熊のぬいぐるみが尖った歯をゴシゴシ磨いていた。熊のぬいぐるみは俺の方を向き、無表情に

言う。

「今日はクッキーを焼くの。たくさん食べるから歯をたくさん磨くの。そうしたらたくさんクッキーを食べられるの。そうしたらたくさん幸せになれるの。」

そう言ったかと思うと、熊のぬいぐるみは全力で洗面所から走り去って行った。

なんだったんだ。俺は気にも止めず水で顔を洗う。ふと鏡を見ると、さっきの熊のぬいぐるみが物陰から俺のことを見つめていた。その目を鏡越しに見ていると、何かおかしなものに吸い込まれてしまいそうになる。

それは重たく

酷く歪んだ日常だった。

雨の日

雨が降っている。

ただ冷たく、落ちて、落ちて。

雨はどこから来るのだろう。多分下からではない。下でないなら上だろう。上からぽつぽつとやって来るんだ。

右からぽつぽつ、左からぽつぽつ、下からぽつぽつ、そんなの嘘だ。優しいカエルは嘘をついた。それは、雨が上からやってくるからだ。優しいカエルはそれが嫌だったんだろう。まだ幼い「僕」にはわからなくて良かったんだ。だから優しいカエルは優しい。今の「俺」には愛おしい存在。

雨の日は外に出よう。ボロボロのビニール傘なんかさして、ジャブジャブとまではいかずとも、バシャバシャと、ぽつぽつと。ああ、雨って色々な音がする。

ぽつぽつ

ジャブジャブ

バシャバシャ

ザーザー

びしゃびしゃ

音が俺を包む。昔の「僕」ならとくに連れ去られてるだろう。音の、見えない見えない深みへと。

さあ外に出よう。雨はまだ降っている。ビニール傘が俺を包む。濡

れないでね。ヌレナイデネ。ああ気持ち悪い。

ひよっこりとカタツムリが姿を現す。どこから？湿った木から生える枝の先の葉っぱの影から。

「こんにちはあなた、欲情欲情。私はカタツムリ。欲情カタツムリ」
このカタツムリはどうも欲情しているらしい。俺に？いや、雨の日
に。

「ここは学校。カタツムリ学校。雨が降っているから中止。全て中止。ああ！欲情！」

カタツムリが葉っぱから落ちた。

べちゃっ

「苦しい私。そんな私はカタツムリ。欲情カタツムリ」

笑いが止まらなかった。俺にはその光景がそれほどユニークなものに見えた。ただ、おかしくて。

「私は消える。なぜなら今日は雨の日。気をつけて。次はあなたが欲情」

そう言うときカタツムリはスッと消えた。カタツムリは光になったのだろう。風と共に、光は流されていく。今日が雨の日でなければ、こんな悲しい気持ちにならなかっただろう。こんな光景を見て、優しいカエルならきつとこう言う。

「雨は上からやってくる。光に刺さり、音を連れ、記憶の中に生きようとする。君の今という存在、僕はまだわからなくていい。」

そつさ、「僕」にはわからなくて良かったんだ。雨がどこからやってくるかなんて。

歩いていくと、公園が見えた。遊戯道具は雨に濡れ、休息の場であるベンチは酷く濡れていて座れそうにない。ブランコを見ると、1人の学生らしき少年がいた。濡れたブランコに座り、ただゆらゆらと揺れている。制服を着た見かけからして高校生か中学生。ただ、そこには1つの違和感がある。

首がおかしな方向に曲がっている。捻れ曲がってると言えばいいのだろうか、曲がった首の先にある頭は姿勢は普通なのに、どこを見ているのかまったく検討がつかない。あるいは空を、地面を

俺を見ているのだろう。

首のおかしな学生に俺は近づき声をかける。

「やあ、君の首はおかしいね。だって、変な方向に曲がってるんだもの。」

首のおかしな学生は、俺の方を見ようとせず、独り言のように呟いた。

「僕は独りで雨に濡れてる。おかしいおかしい、首がおかしい、首はおかしい。ください、顔、目、ください、鼻、耳、聞こえる、音、君は独り？独り？雨の日に、こんな日にねえねえねえねえ…」

黙っていて欲しかった。俺は学生を後ろから突き飛ばした。突き飛ばされた学生は、力なくブランコから落ち、バシャンという水のはじける音と共に地面に倒れた。

「ありがとうねえ」

学生はおかしな首を俺の方に向けてそう言った。

「泣いているのかい？」

俺は倒れながら俺の方を見つめる学生に聞いてみた。

「悲しいよ、雨は悲しいよ、独りは嫌だよねえ。でも泣いてないよ、悲しいけどねえ。首がおかしいんだ、痛いんだねえ、痛いんだねえ」

そういうと学生はスッと消えた。彼もまた光になってしまったのだろうか？ああ、こんな気分になってしまうのも今日が雨の日だからに違いない。

疲れた。俺は濡れたベンチに腰掛ける。冷たい。濡れたズボンが肌に張り付く。

いつから俺は傘を無くしたんだろう。持っていたはずのビニール傘は面影もなく、俺の体はこんなにも濡れている。今日はやっぱり雨の日だ。

空を見上げてみる。やっぱり雨は上から降っている。でも、さっきの首のおかしな学生からしたら、きっと空は上なんかじゃない。右にあるいは左か、右から雨が降ってくるんだ。頬を濡らすんだ。

なんてね。

優しいカエルなら今日という日をなんて言うだろうか？

「雨の日」

そう言うのだろうか？

家に帰ろう。そう思い、ベンチから立ち上がった時、草影からひよっこりとカエルが現れた。

そう、優しいカエルだ。優しいカエルはやっぱり優しい。ゲコゲコゲコゲコ。

優しいカエルは物悲しそうな顔で言う。

「傘は最初から持っていなかったよ。ずっと見ていた。色々なものを見たようだね。色々な音を聞いたみたいだね。でもね、それは全て違うんだ。君はもう僕じゃない。見てごらん僕を。そして君という存在を。君はね、濡れてなんかいないんだよ。雨なんか降っていないんだよ。空はこんなにも透き通っている。傘なんかいないんだよ。」

空を見してみる。違う。きっと違う。空は曇が覆っている。見るからに億劫そうな曇が覆っている。そして上からくるもの。その存在は雨というんだ。

「違う。全部違う。僕が優しいのも。雨が上からくるのも。違うんだよ。見てごらん、この音を。君の目で見るんだ。そう、この音だよ。」

聞こえる。遠くから音が、そうだ。こんな音をきつと歌声というんだ。でも誰が歌っているんだろう。これは、素敵な音だ。そうに違いない。

「見えるね。聞こえるね。音は時に人の心に語りかけてくる。そして、それに応えるとき、君は音を見ることができんだ。どうだい、こんな日もなかなかいいものだろう」

そうだ、優しいカエルはやっぱり優しい。

今日が「雨の日」であると

そう歌声が俺に語りかけている気がした。

そんな日だった。

壁の日

壁がある。そう「それ」はそこにある。「それ」は何か、そう「壁」だ。壁は何のためにあるのか。壁は分かっているだろうか。自分がそこに存在する意味を。もしもそれが分からなかったら、そこに「ある」意味なんてないのかもしれない。そんな存在。

ノックを試みる。

コンコン

「入ってます」

声が返ってきた。そこには一体何があるというのだろうか。

「あなたは誰ですか？」

コンコン

「壁です」

やっぱり返ってくる。壁はどうしてそこにあるのだろうか。なんのためにそこにあるのか。

「中ですか、外ですか」

コンコン

「わかりません」

少し意地悪だったかもしれない。ならこれならどうだろう。

「表ですか、裏ですか」

コンコン

「裏です」

そう、壁は「裏」だった。これ以上聞いたら壁はどうなってしまうのだろうか。おかしくて笑ってしまうだろうか。そんなんじゃない。きっといけない。

俺は助つ人を連れてきた。長生きし過ぎた黒猫。彼は凄い。きっと彼ならこんな壁を救うことができるんだ。

長生きし過ぎた黒猫は言う。

「私には壁がそこにある、ということがわからない。理解が出来ないのだ。私の目が悪いわけじゃない。ただ、これがある理由がわからないのだ。」

俺には長生きし過ぎた黒猫の言っていることが理解できない。やっぱり、長生きし過ぎた黒猫は長生きし過ぎたんだと思う。

長生きし過ぎた黒猫は壁をノックする。

コンコン

「入ってます」

やっぱりそれは壁なんだ。俺は再確認する。そう、これは壁なんだ。長生きし過ぎた黒猫は驚いていた。そう、これが「壁」であるという事実だ。

長生きし過ぎた黒猫には全てが分かったようだった。それが「壁」であることさえ分かれば、理解できないことはない。なぜならそれは「壁」だから。

やっぱり長生きし過ぎた黒猫は長生きし過ぎたんだと思う。

長生きし過ぎた黒猫は俺に教えてくれた。

「壁があるということは、壁はそこにいる。そこにある。これは間違いない壁だ。だから、もう一度聞いてみるといい」

「表ですか裏ですか」

コンコン

「表です」

そう言う壁は始めからそこには何もなかったかのように消えてしまった。表と裏は同時に存在することができなかったんだ。俺は壁を救うことが出来たのだろうか。

「大丈夫だ。心配することはない。なんならあそこを見てみるといい。あれは一体なんだろうな」

長生きし過ぎた黒猫が指差す方を見る。あれは、そう。

コンコン

「入ってます」

そんな日だった。

夜の日

夜になったら早く帰ろう。影を踏まれれば帰れなくなる。そう嘘つきフクロウは言っていた。

嘘つきフクロウは嘘つきだ。彼の言葉に意味があることは少ない。もう空は暗くなる。これから「夜」になる。1日はもう終わりにさしかかっているが、夜はこれから始まるのだ。

空はすっかり暗くなった。暗くなると喜んで街へ出る者達がいる。彼らに怖いものなんてあるはずがない。彼らは恐怖そのものなんだ。

「影っふーんだ」

嬉しそうな声に振り返る。そこにはまるで子供のようにはしゃぎながら、俺の影の上で奇声をあげるピエロがいた。

「ひゃっ踏んだ踏んだ踏んだ、ふっう影が薄くなつてく。君の影はどこにあるの？つゆ」

笑いをこらえているのか、所々に笑い声が混ざりそうになっている。そう言つとピエロはおかしな足取りで走り去っていった。

嘘つきフクロウは言っていた、影を踏まれたら、踏んだ者の影を踏みかえそう。でないと影は盗られてしまう。

俺はピエロを追うことにした。でも嘘つきフクロウは本当に嘘つきだ。

その辺にいる人に聞いてみる。

「もしもし、ピエロがどこへ行ったか知りませんか？」

「知らないよ。知らないよ。僕にはどうしようもないよ。もう、どうしようもないよ」

そういうと男はおんおんと泣き始めてしまった。そうか、この男も夜の者なんだ。

「ありがとう」

俺はそう言っで、おもいきり男の顔を殴ってやった。これでいい。夜の者は信用できない。

「痛いよ。痛いよ。もうどうしようもないよ。もうないよ」

男はさらに泣き始める。すると突然地面から女が生えてきた。その女は男を慰めるかのように肩に手を置く。

「大丈夫。あなたは大丈夫。だってあなたは大丈夫なんだもの。大丈夫だからあなたは大丈夫なの。そう、大丈夫」

男は顔をあげ、嬉しそうな顔で女を見上げる。

「僕にはもうどうしようもないんだ。もうないんだ」

「大丈夫あなたは大丈夫なの。大丈夫だから、あなたは大丈夫なの」

俺の精神は既に崩壊寸前だった。大丈夫？大丈夫って何だ？だいじ

ようぶ？だいじょーぶ？

すると、女が今度は俺の方を向いて。

「あなたも大丈夫。きつと大丈夫だから、あなたは大丈夫なの。大丈夫なのは大丈夫だから。大丈夫だから大丈夫なの」

俺には既にこの女がなんと言っているのかがわからなかった。立ち去ろう。ピエロを探さないと。

時間は深夜27時20分。時間がない、早く探さないと。

嘘つきフクロウは言っていた。影のない者は朝を迎えることができないよ。永遠に夜を、暗闇を、影を探すんだよ。

怖い。怖い。怖い。怖い。影が欲しい。怖い。影が欲しい。暗いのは嫌だ。怖い。怖い。

夢中で走っていると、見覚えのある姿が見える。あれはそう、俺の影を踏んだピエロだ。俺はピエロの肩を思いきりつかむ。

「捕まえた」

そう言ったのは俺ではない。ピエロだ。ピエロがそう俺に言った。俺に背中を向けながらそう言った。俺は捕まってしまったのだろうか。逃げようのない暗闇に、夜という恐怖心に。

「もう、遅い、遅い、朝になるね。朝は嫌だね。朝は明るいんだ。きつと明るいんだ。明るいのは嫌だね。影が見えてしまうもの。暗闇ならいいのに。影は暗闇なら見えないのに。僕は暗闇でしか生き

ていけないんだよ」

このピエロは夜の者だ。夜の者は夜にしか生きられない。なぜなら彼ら自身が影だからだ。影はいつも自然なものでなければならぬ。そう、少なくとも見えている間は。

「影返す。さようなら。昨日とさようなら。今日とさようならっひや」

そう言つとピエロは消えた。彼は俺の影だったのだろうか？

嘘つきフクロウは言っていた、夜になったら早く帰ろう。影を踏まれて、永遠の闇の中。夜の中。

彼の言葉に、意味のあることは少ない。

そんな日だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3459y/>

歪んだ日常

2011年11月19日23時00分発行